

10期20年間にわたって鹿児島県黒豚生産者協議会の会長を務めた沖田速男さん(81)が12日の総会で退任、顧問に就いた。全国トップブランドに上り詰めた「かごしま黒豚」だが、最近は一時の勢いに陰りも出てきている。これまでの歩みを振り返りつつ、今後の黒豚生産の在り方を聞いた。

(三宅太郎)

鹿児島黒豚生産者協議会 沖田速男前会長に聞く

―会長在任の20年間で、どう振り返るか。

「黒豚にとっては激動の時代だった。就任当時は偽黒豚が氾濫し、これを何とかしないとかごしま黒豚への信頼が崩れかねない状況だった。かごしま黒豚証明制度、販売指定店制度を軌道に乗せ、かごしまブランド指定を実現したことで一応の職責は果たせたと思う」

―かごしま黒豚は今も全国トップブランドの座にあるが、ここ数年は生産者数や生産量が減少している。

「黒豚ブームが終わり、

「肉質こそ黒豚の生命線」と話す沖田速男前会長

17日、伊佐市大口田代



おきた・はやお 1931年12月、旧大口市で生まれ、60年から養豚業を始めた。黒豚が大型種に押されて一時絶滅寸前まで減少した際も生産を継続、その後の黒豚ブームにつなげた。93年に県黒豚生産者協議会の第2代会長に就き、「かごしま黒豚」のブランド化に取り組んだ。

「肉質本位」に回帰を

―生き残るためには何が必要か。

「やはり肉質本位の生産に回帰するべきだろう。もともと黒豚は小型で産子数が少ないというハンディを、ずばぬけた肉質で補ってきた。ところが、市場評価を左右する豚肉格付けの底流には、歩留まりや見た目といった流通側の論理がある」

生産者の意識改革必要

「この物差しで生産を続けていると、黒豚の良さは失われる一方だ」

「肉質より経済性を重視するのであれば、何も黒豚である必要はない。大型種(白豚)で十分だ。格付けが合わないなら、自分たちで独自の格付けをつくってもいい。とにかく自分がなぜ黒豚をつ

くっているのかを再確認する必要がある」

―在来種から選抜された第4系統豚が2015年度に完成する。

「第4系統豚にかごしま黒豚の将来がかかっていると言っている。これまでの系統豚(育種改良を重ねた種豚集団)は市場ニーズに比べ、黒豚本来の姿から離れてしまっていた。造成中の第4系統豚を見せてもらったが、純粋な黒豚の資質を持ったものが

「これからは第4系統豚を軸に、ブランドの再構築を図るべきだ。黒豚の経済性は劣るという点、この豚を使いこなすには、生産者自身の意識を『本物志向』に変えていかなければならない」

「かごしま黒豚は長い年月をかけて先人たちが築き上げてきたもの。私たちはそのブランドにただ腰掛けるのではなく、さらに積み上げていく努力を怠ってはいけない」

「ブランドとは生産者がつくるものではなく、消費者のシビアな目で育

て、かごしま黒豚」と評

「価格は、ほかの銘柄豚の追随を許すことはないだろう」

「肉質こそ黒豚の生命線」と話す沖田速男前会長

17日、伊佐市大口田代

「肉質こそ黒豚の生命線」と話す沖田速男前会長

17日、伊佐市大口田代